

野鳥たより

—北海道—

第 51 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和58年 3月21日



ミツユビカモメ 久遠郡大成町湯の尻海岸 撮影 小山 政 弘



もくじ

探鳥地案内(西野幌).....	2
標識されたオオハクチョウについて.....	玉田 誠 3
草原のカワラヒワ.....	小林 清勇 5
私は鶴川へ通う.....	天童 雅俊 6
トドマツ種子の風散布と鳥散布.....	斎藤新一郎 7
風連町忠烈布湖のダイサギ.....	松本 光二 8
韓国縦・横断白鳥観察ツアー参加記.....	三浦 二郎 9
ハギマシコ 400羽.....	藤巻 裕蔵 10
探鳥会報告...ウトナイ・小樽海岸.....	11
探鳥会案内.....	12
鳥民だより.....	12
編集後記.....	12

西野幌

(北海道林木育種場周辺)

20

探鳥地案内

▽位置 江別市西野幌 561

▽交通 国鉄大麻駅から「林木育種場」まで約2Km。札幌大通西3丁目から夕鉄バスを利用すると便利。「あけぼの団地」行きか「栗山」行きに乗りし、北海道測量専門学校前下車、30mばかり札幌寄りに戻り左手の高台に赤屋根の林木育種場の建物が見える。

▽概況 野幌森林公園の一番北側に位置した所に「北海道林木育種場」がある。この庁舎の裏手に当たるところ一帯が試験林になっている。スギ、カラマツ、アカエゾマツなどが植林され、一步園内に入るとアカハラ、モズ、イカルなどが迎えてくれる。

▽探鳥コース ゲートから図の様に一周すると約4Kmある。植林地のため変化に乏しいかも知れないが、沢筋には溪畔の林もあり、春にはコブシが咲き、5月に入るとカラマツなどが新芽をふきはじめる。また森の小動物エゾリス、シマリス、ギタキツネなどが林道を横ぎるのを見ることができる。

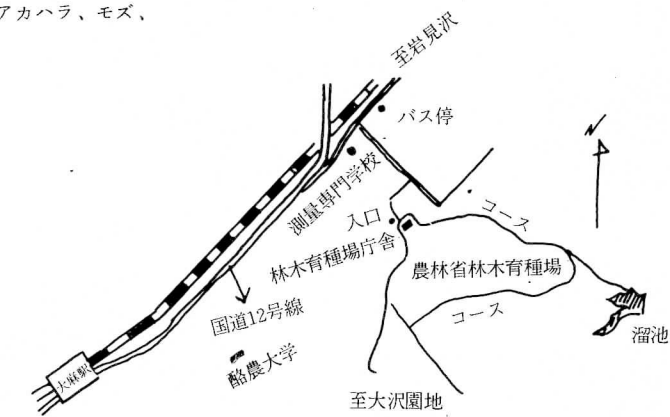
▽見られる鳥 アオサギ、オンドリ、トビ、ハイタカ、ノスリ、ハヤブサ、ウズラ、コウライキジ、ヤマシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、オオコノハズク、ヨタカ、アマツバメ、カワセミ、アカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨド

リ、モズ、クログミ、ミソサザイ、コルリ、コヨシキリ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヤマガラ、キバシリ、メ

ジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、イカル、シメ、ニユウナイスズメ、コムクドリ、カケスなど。

▽特記 3年ほど前にはクマガラが植林地の奥にある天然林などに姿を見せていたがここ数年姿を見かけない。
▽その他 このコースは試験区の植林地となっているので林内への立入りは避け、マナーを守りましょう。

▽地図 2万5千分の1 野幌



藤林忠雄 ☎ 069-01 江別市大麻南樹町2番地R 15-21

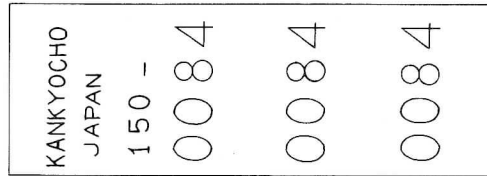
標識されたオオハクチョウについて

玉田 誠

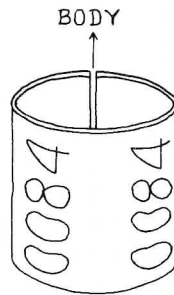
日本で越冬するオオハクチョウ(C. C. Cygnus)にプラスチック製のカラーバンドといている標識環を装着する作業は1974年に始められ約200羽に装着されています。道内の瀧沸湖・ウトナイ湖・尾岱沼などではシーズン中であれば容易に見ることができます。小(大)沼でも見られましたが今春はよく注意して見ないとわからない状態になっていました。一般には標識鳥と聞いていますが、その装着の様子は図のようになっています。これ等の鳥には捕獲装着時に、その場所、年月日、年齢性別、主要部分の計測等が行なわれ戸籍簿のようなものがつくられており、3つの環のうちどれか一つの記号番号が読みとれば、その標識の装着時のすべてが判明するしくみになっております。

したがって記号番号の確認記録を集計することによってその標識鳥若しくはその標識鳥を含む集団の移動状況が判明するわけです。

オオハクチョウ(コハクチョウも)は外見的にはほとんど雌雄の区別がつかず生態研究の障害の一つとなっております。しかし瀧沸湖では次のようなことがわかりました。首環(以後N・Bと略す)足環(同F・B)共に脱落し金属環(同M・R)のみの鳥が無標識のもとペアになり幼鳥を5羽伴っておりました。餌をまいてやると自分の子供たちだと自らは採餌を中止しても子供たちに与え、他の鳥は追い払ってしまうのです。無標識の方は協力的ではありませんがM・R鳥ほど積極的ではありませんでした。たまたま上陸したときにM・Rのナンバーの読み取りに成功し



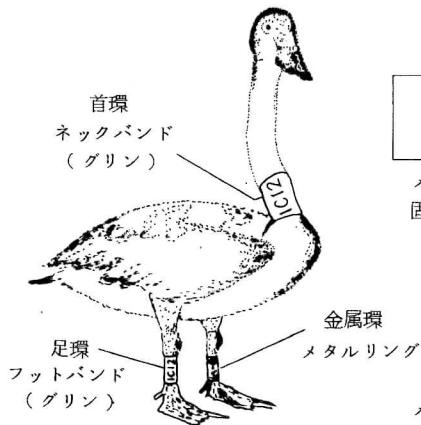
新金属環 (実物大)



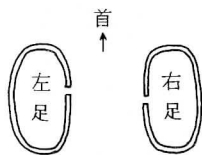
左足への装着状態図
2C84

それは小湊で1977年に装着された1C22で雌でした。私たちはオオハクチョウの母性愛の一端を初めて知ることができたのです。さてこの鳥にも勿論3つの環が装着されたのですがN・B、F・B共に脱落してしまったもので鳥相その他の違いから瀧沸湖では他にもこうした鳥が3羽いることが知られていますが実数はもっと多いように

オオハクチョウの着標状態図



メタルリング(実物大)01012の固有番号1C12であることを示す



メタルリングの装着状況(上から見て)

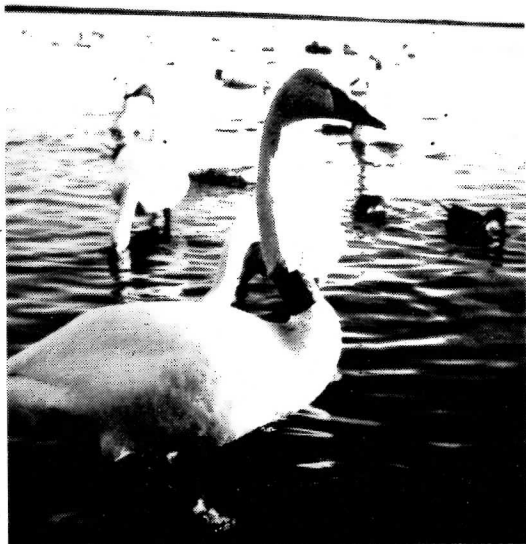
思われます。一方N・Bのみの脱落鳥もかなりおり現在までに35羽が知られております。N・Bの脱落鳥は1981年期(1981年10月から1982年5月まで)に9羽が確認されましたが、小(大)沼のものもこの中の1羽で1978年に小湊で装着された1C48であります。これらの鳥は総べてF・Bのナンバーで身元が確認されました。さてN・Bの脱落鳥がなぜこのように多いかという、セメントの材質や

装着時のテクニックも考えられますが、N・Bの装着を鳥は大変いやがりそれを取り除こうと水でひっかいたり氷の縁にこすりつけたりしているのを何度となく目撃しております。又かつて着標地（バンディングサイト）及びその付近で標識鳥の死体がかかり回収されたことから着標することの可否が論議されました。若し着標したことが主原因であるとなればそれは首環（N・B）の装着に問題があると考えられます。

日本の標識鳥の大部分はそのバンディングサイトでは人工給餌にたよっているもので、ヒトは餌をくれるものと思いついて近寄ってくるのです。その為に給餌地での発見率はかなり高いということは日本の特徴と言えるかと思えます。したがってN・Bは初めから装着しなくてもF・BとM・Rのみでもかなりの目的は達せられると思えます。N・Bがあれば発見し易いことは確かですが鳥の方でも大変なので、人の方での努力を願って、なるべく早い機会にN・Bの装着を止めたらどうかと考えています。

瀧湖では1982年4月までに、小湊で装着した鳥の約30パーセントの20羽を、ウトナイ湖でのものは40パーセントの4羽を、瀧湖でのものは50パーセントの5羽が発見されていますが尾岱沼で装着されたものは極めて僅かで3.5パーセントの3羽にすぎません。このことは瀧湖を渡りの中継地として利用しているオオホクチョウ約4,000羽の中で、その越冬地が判明した分については小湊（及びその付近）のものが大多数を占め、ウトナイ湖でのものがこれに続くわけですが、尾岱沼で越冬するものは瀧湖をほとんど利用してはいないように見受けられます。

標識をつけても、つけなくても毎年かなりの数が死亡しているであろうことは、日本での越冬数が13,000羽±3,000羽であることから推定されます。繁殖地や渡り



の途中で失われるものが大部分のようで、国内でも数十羽が死亡しております。尾岱沼で装着された2羽がサハリンのポロナイスク（49°12' N, 143°05' E）付近で、小湊でのもの1羽と茨城県の古徳沼で装着されたもの1羽がコリマ川中流域の下手（63°30' N, 153°36' E）付近で、又これはコホクチョウですがクッチャロ湖で装着されたものが1羽オホーツク（59°21' N, 143°16' E）付近でいずれも死体で回収されています。コリマ川でのものは多分彼女たちの繁殖地付近、他のものは渡りのルート上の点域を示唆するものと見られ重要な確認例といえます。

一方、国内での渡りのルートのなものがおぼろげながら明らかになりつつありますが、例えば小湊と瀧湖の間をダイレクトに往来しているのか、途中の湖沼川を利用しているのかという点については定かではありません。

鳥たちも疲れたり水が呑みたくなれば名の知れた湖沼川に憩うとは限りません。今年（1982年）春、小湊での標識鳥が2羽様似川の河口で発見され、続いてサロマ湖で憩っているのが確認された例もあります。

鳥は三次限的に行動できる動物ですから杓子定規的なきまった空間を飛ぶ必要はないと思えますが、二地点間の最短距離とか飛び易い地帯とかといったことの判断はできると思われれます。したがって標識鳥の行動等の調査結果がさしせまって今日的に彼女達に何等かの援助が期待されるものではありません。しかし長い目で見れば私共の調査や観察記録が彼女達の種の存続のために役立つかも知れません。日本でこそオオホクチョウは数の知れた湖沼川で群生していますが、繁殖地域では1平方キロメートル当り0.2羽といった状態であり且つ人里はなれた所なので、余程のことがない限り標識鳥の発見は困難だということです。以上の点から見ても私達の調査活動が単なる知識慾や探求心を満足させるためのものでないことを御理解いただき、標識鳥のことに関する事ならどんな事でも結構ですから是非御一報下さるようお願い致します。

日本装着のものは、バンド色（N・B、F・B共に）緑色で、オオホクチョウは3C02のように数字・アルファベットのC・数字・数字の4文字、コホクチョウは061Yのように数字・数字・数字・アルファベットのYの4文字、ソ連で装着のもののバンド色（N・B、F・B共）赤（オレンジ色ともいっている）で052Cのように数字・数字・数字・アルファベットのCの4文字ですが、現在はコホクチョウのみ（チャウン湾近の68°50' N, 170°30' Eで装着）です。又F・Bが左足、必然的にM・Rは右足に装着されている鳥は成鳥（年齢不詳）になってから、又F・Bが右足、したがってM・Rが左足に装着されている鳥は年齢のわかるもの（幼鳥、亜成鳥）のときに標識されたことを意味します。

☎099-36 斜里郡小清水町8区

草原のカワラヒワ

小林 清 勇

カワラヒワは町中でもよく目にするし、庭木の一つに巣が掛けられていても、さもありませんと思っぐらいで珍しくもない。だが、江別の草原で出会ったこの鳥の巣造り風景には、少々面くらった。

2年前の5月早朝。朝もやの中、寝ぼけ眼で草を踏みしだくうちに、下腹が激しく鳴り出した。昨夜の食い合わせが良くなかったか、それとも度を過ぎた酒が悪いのかは知らん。ササの露を浴びる度に腹の奥が泣く。我慢も絶頂に達すれば、リュック投げ出しヤブの中へと駆け込む始末。一件落着と思いきや、小一時間もするとまた催してくる。こんなことを3・4回もくり返したのだろうか、昼を少し回った頃だ。ゲッソリとやつれた私の目の前を、白い物が風も無いのにゆらゆら飛んで行く。やおら双眼鏡を取り出せば、何と、さいぜん御用済みのあの紙さんが、カワラヒワのカミサンの嘴にしっかりとあった。まさかあれが巣材に変わろうとは、何ともばつが悪い。無心な彼女とその白旗に従うダンナ様には、ただただ両手を合わすのみだった。

さて、こんなエピソードもさることながら、草原のカワラヒワはまた奇妙な所に巣を造る。私もそうだったように、町中の巣を見慣れた者にとっては、いささか意外である。以下に、私が見た草原のカワラヒワの営巣場所を紹介しよう。

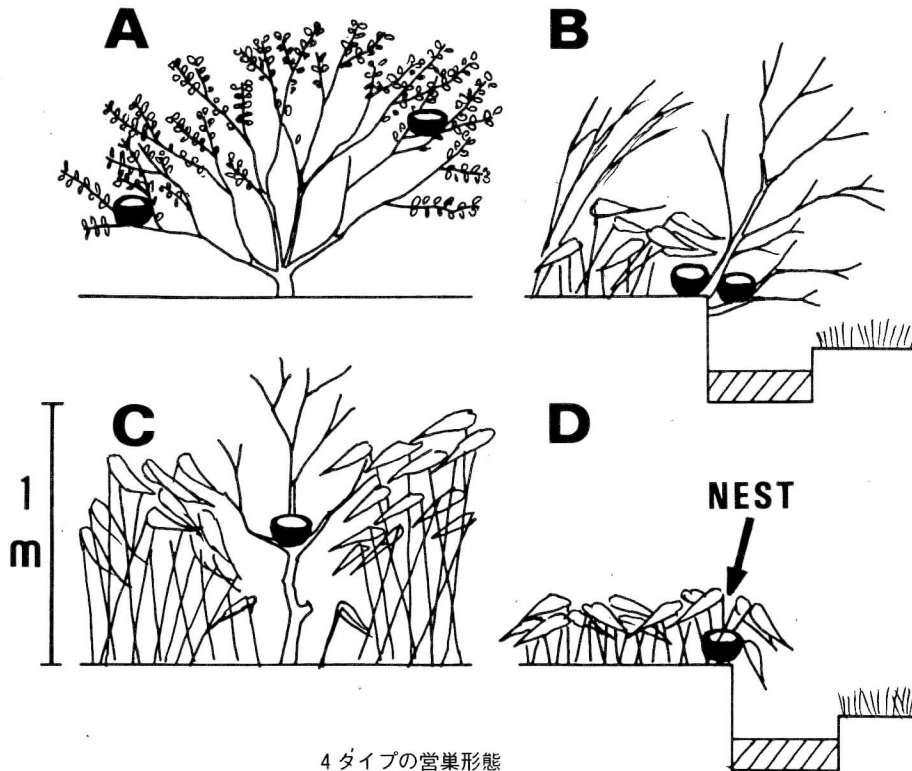
1 環境

この草原は江別市東野幌にある。広さは約26haで、周囲を牧草地・水田・防風林が取り囲み、島のように孤立している。草原内は草丈20cmから1mほどのササとスゲ・ヨシ・ススキが地面を覆い、ノリウツギ・ハイヌツゲ・ヤチハン等の灌木が散在する。また3mから8mのヤチハン高木がパッチ状に生えている。

2 営巣場所

1977年から6年間に発見した巣は45例あり、営巣場所は4タイプに分けられる。(図参照)

A: ハイヌツゲの枝葉の間。(15例) B: 排水溝縁のノリウツギ・ヤチハン等小灌木の根元。巣は灌木の枝と周囲のササ・ススキで隠されている。(16例) C: ノ



4タイプの営巣形態

リウツギの低い位置の枝上や又。周囲を丈の高いササが取り囲む。(11例) D:排水溝縁の草丈30cm以下のササの間。(3例)

いずれの場合も、巣は草本・木本の枝葉によってうまく隠されていた。草原内には高木をなすヤチハンがかなり有るが、営巣は一例もなかった。おそらく、枝葉がまばらで交差の少ないヤチハンの構造が、隠蔽性に劣るからだろう。一方、隠蔽性に富んでいても、葉によって内部が遮蔽されたままのササの中には、巣を造らない。B・C・Dの3タイプは、いずれもササの葉陰を利用しているが、B・Dは共に排水溝縁にあって側面が開放されている。またCは、営巣樹の枝の広がりによって上方向が開放されている。おのずとここが巣造りの足掛りとなる。

3 市街地との比較(特に巣の高さについて)

地面から営巣地点までの高さを、同6年間に発見した江別市街地のものと比較すると、表ようになる。(市街地の営巣樹はE-ナナカマド、F-カラマツ、G-イチイ、H-ニオイヒバである)

巣は、草原では0mから1mに、そして市街地では1mから5mの高さにあり、1mラインを界にして分明に分かれる。この違いは、隠蔽性に富んだ場所が、どの高さにかかによって現われたものである。草原では、市街地の営巣樹と同等の高さのヤチハンが有りながら、低い位置の隠蔽性に富んだ場所を選ぶ傾向が、差をいっそ

高さ(m)	草 原				市 街 地					
	A	B	C	D	計	E	F	G	H	計
0	—	16	—	2	18	—	—	—	—	—
~0.25	2	—	—	1	3	—	—	—	—	—
~0.50	5	—	7	—	12	—	—	—	—	—
~0.75	3	—	2	—	5	—	—	—	—	—
~1.00	5	—	2	—	7	—	—	—	—	—
~2.00	—	—	—	—	—	—	—	2	1	3
~3.00	—	—	—	—	—	1	2	5	3	11
~4.00	—	—	—	—	—	4	—	4	—	8
~5.00	—	—	—	—	—	2	1	—	—	3
計	15	16	11	3	45	7	3	11	4	25

巣の高さの比較

う顕著にしている。従って草原でも、隠蔽性に富んだ高木が有れば、より高い位置にも営巣するだろうし、両地域間の差は少なく成るものと思われる。

このように、営巣場所は環境に応じて変えられた。では他の生態・社会構造は、地域・環境によってどう変わるのだろうか。彼らは、変えられるものと変え得ぬものの中で、何を考えているのか。近年中村浩志氏は、信州と京都における研究から、生態の地域差を見いだしている。広範な資料が必要とされる中、本道のカワラヒワの生態は誰の手で解明されるのだろうか。シマアオジ調査の行きずりとして垣間見る私には、とても果たせぬ夢である。

☎069-01 江別市野幌町22-10 小林荘2号室

私は鶴川へ通う

残念なことに、私は近眼だ。おまけに、面倒臭がりときている。森の葉陰にチロ、チロと出たり入ったりの種類を追いかけけるには、肉体的・精神的条件が不十分だ。かろうじてその条件に合致するのは、ツギ・チドリたちくらい。

私は鶴川へ通う。

ウィークデーを人と会うことで過すと、人間ウンザリ都会ウンザリ、という気持ちが募ってくる。牧場なんてのは、かなりの少女趣味、と自らを笑いつつ、あの緑のなだらかな起伏が、たまらなく良い。ならゴルフ場でも同じ、と云われそうだが、あれは成金趣味、という超偏見があるから駄目。成金に成り得たら、嬉々としてやるかもしれないが、可能性は薄い。という訳で、私は鶴川へ通う。

ひたすら待つ。運良く現われれば良い。しかし、そんな日はあまりあるはずもない。こうなると、もういけない。己れの不幸を嘆き、奴等を罵り、フテ寝となる。それでも未練とやらは、付きまとう。そして、やっぱり駄目。となると、豊かなる自然も、大地との交歓も建前

天童雅俊

に転化。時間の浪費が腹立たしい。

しかし、この節ようやく判ってきた。貧困なる精神はいけない。鳥を観るには、紳士・淑女の心構え、そう、ブルジョアの余裕が必要なのだ。彼の国では王様がいたす優雅なるものなのだから。この心情に到れば、奴等もきつと来てくれる、と思いつつ、私は鶴川へ通う。



☎063 札幌市西区西野10条8丁目

トドマツ種子の風散布と鳥散布

齋藤 新一郎

まえがき

北海道の代表的な常緑針葉樹のひとつであるトドマツ（トドモミ）は、その有翼種子からみて、種子の散布はおもに風力に依存し、いくらか水流、重力による斜面の降下なども散布営力として作用すると考えられる。

ところが、黒田（1982）の紹介によると、TURČEKはチェコスロバキアのみ（ヨーロッパモミ）の林で、カケス（ヨーロッパカケス）が、その種子を貯食し、その一部が発芽することを報告している。

筆者は、1982年秋に、トドマツの実生の束生を観察し、そこがハイマツを中心とするホンガラスの貯蔵所（Cache）であった（齋藤、1983）ことから、鳥散布の意義を考えてみた。

風散布

まず、トドマツの球果と種子の形態をみると、モミ属に共通であるが、球果は梢端に近い枝々に上向きにつき9月下旬～10月上旬に成熟し、中軸を残して崩壊する。種鱗と種子はバラバラに風散布ないし重力落下する。種子は翼をもつが、エゾマツ（トウヒ属）、カラマツ、アカマツと比較すると、種子本体のサイズと翼のサイズから、風散布される距離はかなり小さいとみられる（図-1）

母樹から散布された種子（実生）までの距離を観察すると、母樹に近いほど多量の種子が落ちている（図-2）。母樹が孤立木で、散布時に強風が吹けば、樹高の4倍の距離まで散布されることもあるが（齋藤ほか、1979）、

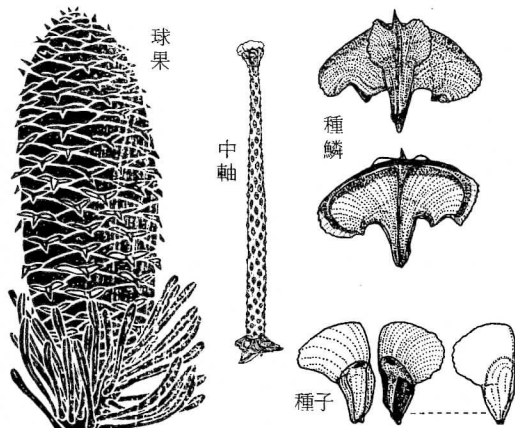


図-1 トドマツの球果と種子（齋藤、1982）

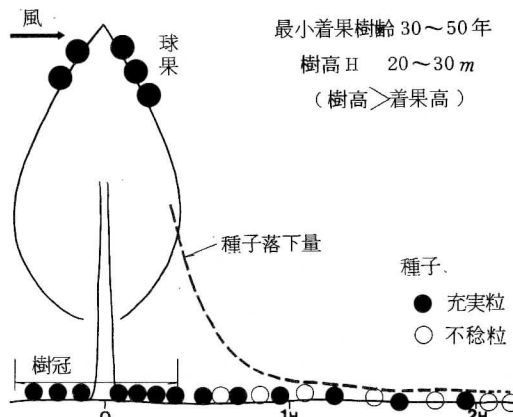


図-2 種子散布の模式図（齋藤ほか、1979）に加筆

一般的には、食害後に充実粒が発芽し、環境圧に耐えて成長してゆくための十分な種子密度を考慮すると、トドマツでは樹高の1（～2）倍が有効距離とみられている。散布距離（L）と、着果樹齢（T）とから、移住の速度（V）は次の式で表わされる。

$$V (m/年) = L (m) \div T (年)$$

L = 100 m、T = 30 年とおけば、トドマツの風散布による移住の速さは $V \div 3 m/年$ となる。1 万年間でも 30 km にすぎない。このスピードで、氷河期の到来および終焉に対応できたのであろうか？

鳥散布

そこで、鳥散布をみてみよう。

知床における観察では、ハイマツを主眼としたものであるが、ホンガラスの Cache には、次のような木本の束生ないし単生がみられた。束生は、風散布でなく、Caching（種子のまとめ埋蔵）に由来している。

* 束生 (Clumping of seedlings) とは、1 点（1 穴）から 2 本以上の実生が成育している状態である。

トドマツ	有翼種子	ほとんど単生、一部束生（2～6本）
ハイマツ	無翼種子	ほとんど束生（2～23本）、一部単生
ミネカエデ	翼果	ほとんど束生（15～40本）、一部単生
ダケカンバ	〃	すべて単生
ミズナラ	堅果	すべて単生

これからみると、有翼種子ないし翼果といえども、大粒のナッツ状のものは、ホンガラスの貯食対象となって

いる。サイズ、採取しやすさなどからみれば、トドマツ種子は、ハイマツ種子の不足を補うものであろう。

ホソガラスの運搬距離は、母樹群からCacheまで、筆者の諸観察では、10 Km以内であるが、22 Kmに達する(ランナーほか、1982)こともある。これはハイマツのような無翼種子マツ類のケースであるが、モミ属種の種子でも、同様に考えられる^{**}。

***ランナーほか(1982)は、ラジオカルパモミの種子が0.5~1 Kmも風散布されたと想定している。

従って、鳥散布の観点に立つと、 $L = 20 \text{ Km}$ 、 $T = 30$ 年とおくことができ、移住の速さは $V \doteq 670 \text{ m/年}$ となる。つまり単純計算で、1万年では6,700 Kmという数値となって、地史における気候変動が問題とならなくなってしまう。

むすび

一見すると、有翼種子は風散布であり、多肉果は鳥散布である、という形態的・機能的な先入観にとらわれてしまいやすい。しかし、鳥散布には、消化管通過型の散布(おもに多肉果)のほかに、貯蔵型の散布(食べ忘れられた種子が発芽する、ナツ状のもの)もある(黒田、1982)。しかも、後者では、種子が土中に埋められる。これは発芽のための必要条件である。

トドマツ(トドモミ)をはじめ、モミ属種は世界に広

く分布しているが、これらの分布を、気候条件+風散布で片付けずに、カケス・ホソガラスとの関連でも再考してゆく必要がある、といえるのではなからうか。モミ属種の球果の崩壊と狭めの翼に由来する、ごく近い距離の種子の風散布は、鳥散布による遠い距離(移住)と、土埋め(発芽条件)とにかなり補完されている、と考えてよいであろう。

参考文献

- 黒田長久、1982：鳥類生態学。641 pp., 出版科学総合研究所、東京。
ランナーほか・斎藤新一郎抄訳、1982：カナダホソガラスによるフレキシリスマツの種子散布。ひがし大雪だより、7：8~9。
斎藤新一郎・水井憲雄・斎藤 満、1979：豊富温泉裏山におけるトドマツの天然更新 - 地表処理と散布距離。北林技研論文集、53：108~110。
斎藤新一郎、1982：果実と種子の形態用語図説(3) - エゾマツ・トドマツ。北方林業、34：285~288。
斎藤新一郎、1983：知床半島におけるホソガラスによるハイマツ種子の隠し場の観察。鳥、32：~
☎ 079-01 美幌市光珠内町東山、
北海道立林業試験場

風連町忠烈布湖のダイサギ

松本光二

風連町忠烈布湖へダイサギ、チュウサギが飛来して来たことについてお知らせします。

57年5月14日(金)、丁度バードウィークの期間中ですが、忠烈布湖に大型の白いサギが2~3日前から来ているという情報をききつけ、早速出掛けました。湖の入口付近の湿地で盛んに餌をついばんでいる白いサギを発見しました。双眼鏡で観察しながら、図鑑で調べたところ、眼のまわりの色、クチバシの色等から判断してチュウサギらしいということが分かりました。翌日の早朝に同じ場所へ行ってみますと、2羽飛来していました。1羽はやや大きいサギでした。同様に図鑑で調べたところ、ダイサギであることが分かりました。その後、毎朝夕観察を続けていたところ、17日の夕方、新たに1羽飛来していることが分かり、計3羽の白サギを確認しました。その3羽はダイサギが1羽、チュウサギが2羽でした。20日頃まで湖の周辺の湿地でたずみ、採食していましたが、21日以後、飛び立ったか確認することはできませんでした。

写真を数枚撮ったので、帯広畜産大学の藤巻氏に送り鑑定していただいたところ、間違いなく、ダイサギとチ

ュウサギで、それも若鳥でしょうとの返事でした。

蛇足ながら、一昨日の5月、名寄で鳥の好きな友人たちが集まり、名寄野鳥の会を結成しました。5月16日(日)忠烈布で探鳥会を行ない、ダイサギ、チュウサギを初め、32種の野鳥を確認することが出来ました。



チュウサギ

韓国縦・横断白鳥観察ツアー参加記

三浦 二郎

昭和57年11月21～23日仙台で開催された日本鳥学会大会と伊豆沼エキスカッションとうまく接続して、日本白鳥の会の韓国白鳥ツアーがありましたので、北海道根室からの参加では延べ11日間もの旅行になりますが、思い切ってその両方に参加してきました。北海道とは遠い地での観察行でしたが、何せ翼ある羽族のことであり、彼等には国境はないのですから、北海道の野鳥とは全く無縁ではなからうと考え観察の一端を述べさせて頂きます。

白鳥の会副会長である新潟の本田 清氏の呼びかけで計画されたツアーで、新潟から2名、宮城伊豆沼と茨城から各1名、北海道からは瀧渇湖の玉田氏と私の5人という小じんまりしたメンバーでした。当初の参加希望者は20名近くあったようですが、例の教科書問題などによる対日感情悪化が影響して、このような人数になったようです。しかし実際に訪韓してみるとそのことは杞憂だったことが分かりましたし、小人数であったことがガイド役の研究者との接触到密であったというメリットもあったのです。

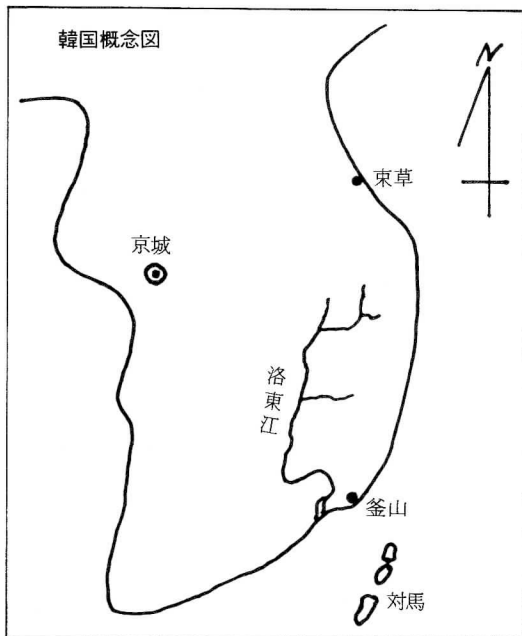
さて、縦・横断というのは、新潟からソウルへ飛び、更に釜山まで南下して洛東江河口部と貯水池で観察、そして再度ソウルへ北上その夜は韓国野生動物保護協会幹部との交歓会、また次の日東海岸東草(ソクチョ)と鏡浦(ギョンポ)の沼で観察し、まさに韓国を縦・横断

したことになるわけです。私はこのコースに大きな魅力を感じたのです。というのは、私が生まれ育ったのは京城(ソウル)ですが、戦時中は野鳥観察のために京城を離れることが許されず、京城以外での野鳥観察の経験が殆どなかったからです。

とにかく実際に行ってみて洛東江河口はすばらしいの一語につぎの野鳥生息環境で、実際に観察できたのは、ハクチョウ類2～3,000、ガン類3,000、カモ類数万、その中には私として初観察のツクシガモ100も含まれています。シギ・チドリ類もかなりいましたが、それらは9～10月がピークでその時期には数万数十万という数だそうですが、今回はタゲリがゲレレ、ゲレレと騒いでいたのが嬉しいことでした。何せいくつかの大きな洲があってそれらはヨソ原と豊富な底生動物の棲み穴が無数にある砂泥質の干潟だけで、人間は全く踏み込んでいないのですから、野鳥の楽園であるのは当然のことです。根室の風連湖を私共は「野鳥の楽園」と称してその保護を訴え続け、現に根室市の委託を受けて、日本野鳥の会指導部と根室支部とが協力して野鳥公園のマスタープラン作りを進めておりますが、この河口部のスケールと較べると何となくいじましい感じがします。昨年、野鳥の会九州ブロックとの共同調査が行われ、その時の報告書を贈られました。その巻頭グラビアにソリハシタカサギの営巣写真が掲げられていたのは度胆を抜かれました。

洛東江河口での観察では、ソウル大学院生の李さんのガイドでしたが、彼は日本語は全く駄目で、その野鳥生息状況の全容を聞き出すのは困難でしたが、東海岸北部の東草での観察には慶熙大学助教授の尹茂夫先生も加って頂き、片コトながらの日本語でしたが、かなりくわしくお聞きできました。東草での観察の目玉はコブハクチョウでしたが、今回はまだ時期が早く実際には見ることができず残念でした。12月中旬になると40羽前後のコブハクチョウが渡来するそうです。コブハクチョウといえ、北海道でも大沼とウトナイ湖に居ついていて飼鳥の野生化というイメージでとらえていましたが、実際には遠距離の渡りをやってのける野性の鳥なのです。尹先生のお話では、この一つの汽水湖と二つの淡水湖には、オオハクチョウ200、コハクチョウ40～50が渡来する由ですが、今回はコハク7羽だけで、まだ時期が早いようです。しかしカイツブリ・ミミカイツブリの他にカンムリカイツブリが観察できたのは収穫でした。

どの観察地でも水鳥類はそれ程人をおそれていません。何故かというと、韓国では全国8ヶ所だけが狩猟地とし



て指定されていて、他はすべて禁猟区になっているからなのでしょう。交歓会の席で、日本では国立公園内でも狩猟ができるという話をしますと、韓国の協会の人はびっくりしておりました。さすがに白鳥の越冬地として誇れる尾岱沼でも、春別川河口部とその南の延長海岸が鳥獣保護区に指定されているだけで、野付半島を含めて野付湾の全域が乱場であることは、はずかしくて口に出すことはできませんでした。

国情の違いはありまじょうが、韓国を含めた朝鮮半島がアジア東部の野鳥生息環境として重要な地位を占めていることが高く評価されるようになるだろうと思いました。それにしても、韓国のパードウォッチャー人口の少なさを協会幹部の方は嘆いており、日本との研究交流を強く望んでおられました。

尹先生から慶熙大学キャンパスでの2年間の観察レポ

ートを頂戴しましたが、ソウル中心部から東北東約8Km離れた郊外8.5kmのキャンパス内で観察された鳥は58種、その優占種はスズメとカササギで、全観察個体数の約60%を占めているというのは、ソウル周辺は都市化の進行で鳥相が貧弱化していることを物語っております。私が京城に住んでいた頃の鳥相とはよほど落ち込んできたなという感じでした。例えば今年NHKの画面に登場した松前大島でのコウライウグイスは尹先生のリストには出現しておりません。この種は戦前の京城では、街中でも営巣していて、あの朗らかなホッホッホケキョを聞かせてくれたものでした。

今度は白鳥の時期でなく、5~6月の繁殖期の訪パードウォッチングツアーをやってみたいなと思います。

☎ 088-26 標津郡中標津町字養老牛347
養老牛小中学校

ハギマシコ 400羽

藤 卷 裕 蔵

2月13日は道東地方のオゾロワシ・オオワシ一斉調査であった。この日は-5.2℃という大寒気団が北海道をおおい、帯広市内も最低-22.3℃となり、この冬一番の寒さとなった。野外調査の日としては、あまりうれしいことではない。十勝支部がこの調査に参加するのは、今回で2回目である。前日の打合せで、十勝川、湧洞、生花、黄金道路の4班にわかれることにし、私たち3人は黄金道路へと向かった。

広尾の市街をすぎて、フンベあたりから国道は海岸沿いの崖下を走る。車の中から目をこらすが、ワシ類は1羽も見られない。ところどころで車をとめて、双眼鏡で急斜面の樹をさがすが、視野にはいるのはハンプトガラスだけである。冬の鳥の調査には、当たりはずれの差が大きい。この日はあきらめ、とりあえずえりも岬まで行くことにした。

百人浜まできて、やっとオオワシ1羽に出会うことができた。海岸沿いには雪が少なく、枯草がだいぶ頭を出している。この冬は各地でベニヒワがよく見られているので、ワシ類を期待できないとしても、ベニヒワくらいはと思っていた。まず現れたのはツグミ、1羽が道路を横切って草むらにおりた。車をとめこのツグミがとび出した方を見ると、灌木の中にまだ数羽のツグミがいた。ついでにと思い、双眼鏡を動かすと、灌木の向うの一段と高くなった枯草の原に沢山の小鳥が見えた。枯草にとまったり地上におりてはまた飛びたち、せわしく動きながら、私たちの進もうとするのと同じ方向に移動していた。海岸沿いには、数十メートル間隔に海岸防風林が造

成されているが、樹高はまだ1メートルほどである。群はそれに見えかくれしながら遠ざかっていった。私たちは車で先に進み、国道と平行して移動する小鳥の群を待つことにした。

防風林を保護する防風柵のかげから小鳥が現れ、目の前の草原におりはじめた。黄色味のある嘴、腹に淡いバラ色の斑点がある。全部がハギマシコであった。地上におりたかと思うと、すぐ飛びたち、あいかわらず着かかない。最初に群を見たときに、ずいぶん多いなとは思っていたが、200羽ぐらいの感じであった。一度に数十羽が防風柵のかげからとび出してくるので、全部を正確には数えられない。見落しがあるのを覚悟の上でカウントをつづけた。200羽を数えても、まだハギマシコは次から次と現われてくる。300羽を数える頃には、双眼鏡をもつ手が少しだるくなってきた。350羽を数えるころになって、やっと双眼鏡の視野にはいってくるハギマシコの数が少なくなってきた。カウントしたうち見落し分を考慮すると、この群は約400羽はいたであろう。

十勝地方では、これまでも冬にハギマシコはよく観察されている。見られるのは雪の少ない河川敷、海岸で群としては普通10~50羽の範囲で、200~300羽というのはいない。

この日の調査は、寒さも一番であったが、出合った鳥の方も一番であった。

☎ 080 帯広市稲田町帯広畜産大学

ウトナイ湖

57. 11. 14

種田多栄子

ウトナイ湖へ野鳥の観察に。これは前々からの4年になる息子の提案でした。折りしも探鳥会の集まりがあると新聞を見てグッドタイミングとばかり張り切って出かけました。「バードウォッチング」という言葉も目新しく正直「この寒い中でぐるうさま」といったしらけた気持でした。そして望遠鏡片手に熱心な皆様を見ていて何か別世界にでもきたような、索漠な俗世間から命の洗濯といったすがすがしい気分になってまいりました。有意義な一日でした。鳥について無知の状態で出かけた私達はハクチョウやカモなどの種類、特徴、性質などを次々に教えていただき鳥への関心は段々と高まり興味も深まってまいりました。今まで何の気なしに見ていた身近なこれらの鳥に子供達が愛鳥精神をもって自然の恩恵に少しでも気づいていてくれたらと思っております。息子は家に帰りゴルフで参加しなかった主人に今日吸収した知識を息せき切って説明し、さっそくノートにまとめておりました。それにしても自然を愛する探鳥会の人々は、本当にやさしい方ばかりですね。大変お世話になりありがとうございました。〔記録された鳥〕カイツブリ、アオサギ、マガン、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガモ、カルガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オナガガモ、ホンハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミヨアイサ、カワアイサ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオバン、ハマシギ、カモメ、ハクセキレイ、シジュウカラ、ホオジロ、ハンボソガラス、ハンブトガラス、(ドバト)(コブハクチョウ) 30種

〔参加者〕鈴木敬三・菫世子、栃本健二郎、道川 弘・富美子、渡辺紀久雄、浪田良三・典子、萩 千賀、五十嵐優幸、福井スエ、鷺田善幸、曾根モト、佐藤雅之輔・鈴枝、房川比呂志、原 幹子、小堀煌治・次郎、品田延一、菊地正利、野崎良平・栄子・えりこ、犬飼 弘、柳沢信雄・千代子、関口健一・誠、二上 篤、戸津高保・以知子、谷口一芳・登志、天童雅俊、石岡宗子、田本俊基・和枝・剛、北隅嘉長・静子、松下隆雄・滝江・博、野々村 菊、種田多栄子・謙一・将郎、紅林雅文・幸子、野口正男、北尾 論、船尾恭子、本間久二彦・忠、大坊幸七、清水 幸・朋子、長谷川涼子、羽田恭子、梅木賢俊(61名)

〔担当幹事〕梅木賢俊、紅林雅文

〒063 札幌市西区山の手2条6丁目

小樽海岸

57. 12. 12

池田晃子

冬の海、そこは、どんよりと暗い、寒々とした世界、そんな北国の冬の海のイメージを、すっかりと塗り変えてくれた小樽海岸探鳥会。そこには、鳥を愛する者と鳥たちとの心豊かな交流の世界がありました。

初めて参加した昨年は、見るもの、聞くものすべてに感激。今年はといえば、いつになく冬になるのが待ちどおしく、昨年同様、鳥たちは、渡ってくるだろうか、お天気はどうだろうかと心配していましたが、お天気にも恵まれ、昨年を上回る確認数で、自然の恵みに感謝せずにはいられない気持ちでいっぱいです。

祝津では、カモメたちの群れ飛ぶ勇大な姿に、歓喜の声をあげ、初めてお会いする方なのに、すぐ気軽に声をかけあい、プロミナーをのぞかせていただいたりと、探鳥会独特の世界へと、自然に導びかれていく。皆が、自然と一つの世界にとけ込んでいく状態、これが、探鳥会の魅力の一つだと思います。時のたっていくのも忘れ、風の冷さなどなんのそのと、双眼鏡から目を離さず夢中になっている様子に、進行役の幹事さんは、時間との二人三脚で、さぞかし大変だったことでしょう。本当に、御苦労様でした。

小樽の野鳥の会に入るまで、カモメにあんなにたくさんの種類があったなどと、全く知るよしもなく、飛んでいる姿にしても、みんな同じに見えていたのに、何と今年は、少しでも、見分けがつくようになった時のうれしさ、と言ったら、体験した者でなくてはわからないもの。そんな私の心がわかってか、北浜岸壁では、ミツユビカモメが、目の前を何度となく旋回してくれるではないですか、「今日のヒーローは、僕だぜ」といわんばかりのハッスルぶり、私たちを仲間だとも思っているかのような、親しみ深いあの姿は、もう一度、一人で行って見ても、多くのカモメ類の中でも、見つけ出せそうな気がします。

それにしても、多くの鳥たちを見た中でも、最後に、見つけたあのハシビロガモ、けがをして渡って行けなかったとの事ですが、是非、この冬を乗り切って生きてほしいものだと思います。何の助けもしてあげられないが、残念でなりません。がんばってネ。ハシビロガモさん。

最後になってしまいました。場所を移しての齊藤君のスライドの上映では、大変たくさんの鳥たちのスライドと声を合わせてのこまやかな解説は、とてもわかりやすく、よい勉強になりました。準備が大変だったことと

思います。ありがとうございました。これからも、いい写真をたくさん撮って、また見せて下さいね。

また、来年の探鳥会では、たくさんの方々と、鳥たちとの出会い、再会を願ってペンを置きます。

〔記録された鳥〕 オオハム、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ハンビロガモ、ウミウ、ヒメウ、ウミスズメ、ウミガラス、ケイマフリ、ウミネコ、カモメ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、シロカモメ、ワツカモメ、ミツユビカモメ、ユリカモメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、(ドバト)、ハンボツガラス、ハンブトガラス、以上 27種

〔参加者〕 大和民承、鍋島由次郎、高橋秀美、堀 隆司、清田吉晴、竹内喜代治、富樫敏雄、吹田長四郎、添

田潤助、松下明広、齊藤正彦、吉田五市、亀尾紋十郎、中野高明、渡辺俊夫、新井祐子、池田あき子、後藤ひろみ、細山麻枝、岩井節子、吉村澄子、霜中愛子、三浦満智子、中村道子、中村麻子、坂東玲子、伊藤玉枝、

(以上、小樽からの参加者)

青木二郎、船尾恭子、五十嵐優幸、梅木賢俊・翼、戸津高保・以知子、浪田良三、松下 博、柳 欣子、柳沢信雄・千代子、五十川祐弘・祐二・ハナ子、山部栄子、成毛伊代、荒谷静子、新谷三和子、三本木セツ、道川 弘、
・富美子、園部恭一、岩泉ゆう子、屋代育夫、北尾 諭・久美子、佐々木国雅、横田通典、谷口一芳・登志、渡辺紀久雄、天童雅俊、長谷川涼子、羽田恭子、早瀬広司、野々村 菊、長岡宏幸・範子・滋雄・ゆりこ、以上 68名

〔担当幹事〕 亀尾紋十郎、中野高明、渡辺俊夫

☎047 小樽市稲穂5の4の6



6・7月は草原の鳥を見に出かけましょう。8・9月はツギヤチドリを鶴川河口で見ませんか。ぜひ御参加下さい。きっと良い思い出が残ります。

〈植苗・ウトナイ湖〉昭和58年6月19日午前9時 千歳線植苗駅集合

〈福移〉昭和58年7月3日 午前8時30分 札幌市営バス札幌線福移入口停留所集合

〈鶴川〉昭和58年8月28日・9月18日 午前9時10分 日高本線「鶴川駅」集合

〈野幌森林公園を歩きましょう〉

上記の探鳥会のはか、次の探鳥散歩を行います。

昭和58年6月5日・7月17日・9月25日 9時30分までに野幌森林公園、大沢口(中央口)。上記場所がわからない方は、8時30分までに記念塔前に集合して下さい。どの探鳥会も暴風雨でないかぎり行います。昼食、筆記用具、観察用具(双眼鏡など)、雨具などを用意下さい。だいたい午後2時頃の探鳥会も終了します。

探鳥会のお問い合わせは 早瀬 (011)611-0949 まで。



〈会費納入について〉

「会費納入状況のお知らせ」を同封しましたので、お確かめ下さい。

会費は、個人1,500円、団体4,500円です。会費納入には、郵便振替(小樽1-18287)をご利用下さい。郵便振替用紙は、郵便局にも置いてあります。

〈写真展を開催〉

バードウィークにちなんで、5月9日から同月25日まで三菱信託銀行(札幌市中央区北4西4)で、写真展を開催いたしました。

今年は30点の応募がありましたが、このうち札幌の方

の応募が多数を占めておりました。来年は地方の方も大いに応募していただきたいと思いますので、今から来年の写真展用に素晴らしい写真に挑戦してみてください。

〈事務局の幹事が代わりました〉

本会で事務局を置いている北海道自然保護協会に勤務しておりました幹事の島田明英さんが都合により退職いたしました。島田さんには郵便物の受取り、野鳥だよりの発送等多大なる尽力をいただきました。長い間、ご苦労さまでした。

また、島田さんに代わりまして、同協会事務局長の片岡秀郎氏に幹事をお願い申しあげた次第であり、何かとお世話になることが多いと思いますので、ご紹介いたします。

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

3月発行予定のこの号も、初校の校正をしている現在バードウィークの最中です。50号記念号を発行した後遺症ということで御容赦下さい。

50号の表紙は野鳥だよりの初カラーでしたが、林さんの写真自体のすばらしさもあって大好評だったようです。いつの日か毎号カラーというのは夢でしょうか。(島田)

〔北海道野鳥愛護会〕年会費1,500円(会計年度4月より)郵便振替 小樽 1-18287

☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465